

映画「健太のトンボ日記」

(新生映画株式会社製作、文部省選定)

いつのまにか青空の下で遊ぶ子供達の姿が少なくなりました。やさしさや生命の重さが分からない子どもや大人が増えています。

この映画は、都会にすむ一人の少年が、夏休みを田舎の父親の実家で過ごすなかで、「トンボ公園」を知り、そこを守り育てている地域の大人や子どもたちとの交流を通して、自然とふれあい、そして、トンボたちも生きるために一生懸命であることを学び、心身ともに成長していく姿を楽しく描いています。

ぜん息を持つ健太は、母親と療養をかねて父の両親の田舎へ来ています。そこには「トンボ公園」があり、池でとれたトンボのヤゴをもらって、健太は飼育を始めます。

ぜん息を治すための毎日の乾布まさつと水かぶりの日課に、ヤゴのエサとりが加わり大変です。それがぜん息に悪いのではないかという、母親の心配をよそに、健太は一生懸命ヤゴのめんどろをみます。

何日かすると、ヤゴはエサを食べなくなりました。羽化が近くなったのです。ある日の夜中、いよいよ羽化が始まりました。割れた背中から、頭と胸が腹の力で押し出され、のけぞるようなかっこうで、しばらくじっとしている。そして、突然殻につかまると、一気にしっぽを抜きます。みずみずしい体が出て、しわくちゃにたたまれていた羽も伸びてきました。神秘的ともいえる、小さな生命の誕生を、みんながかたずをのんで見つめています。透き通った羽を、閉じたり開いたりする、生まれたばかりのヤンマ。健太の瞳もきらきらと輝いています。

やがて、健太はヤンマを虫かごに入れて、トンボ公園へ放しにきます。ここでは、池の上をトンボたちがスイスイと飛び交っています。